

2015年11月13日

萩ジオパーク推協だより

No. 6

〒758-8555 山口県萩市大字江向510

TEL: 0838-21-7765

e-mail: hg-geo@city.hagi.lg.jp

HP: <http://www.city.hagi.lg.jp/soshiki/12>

発行: 萩ジオパーク構想推進協議会 事務局

“Enjoy Geopark World!” 日本ジオパーク霧島大会 2015.10.27(火)~29(木)

第6回日本ジオパーク全国大会 鹿児島県霧島市・霧島市民会館ほか

11月11日のユネスコ総会科学委員会で世界ジオパークがユネスコの正式事業として承認され、いよいよ国際的に機運が高まってきました。その日本版である「日本ジオパーク」認定は、全国で39地域に拡大。わがまち萩も、平成28年の認定を目指して、市長をはじめ協議会会員など16名が、10月末の3日間開催された「日本ジオパーク霧島大会」に参加しました。霧島は、韓国岳、高千穂峰や新燃岳などの見どころをもつ日本ジオパークの1つ。全国から延べ約9000人のジオガイドら関係者が集い、会場は気温と高揚感で熱気に満ちていました。鹿児島県は3つのジオパークを有するジオパーク活動の盛んな地であり、認定3つ目となったのは、今秋認定の「三島村・鬼界カルデラジオパーク」。3つの離島で構成され、人口わずか380人ほどの小さな村が認定を果たしました。豊かな自然と魅力ある地域発信に、同じ離島をもつ地域住民として心を動かされました。

基調講演では、世界ジオパークネットワーク副会長のイブラヒム・コモオさんが「地域住民はジオパークの一部」と唱え、山陰海岸ジオパーク学術部会委員などを務める新名阿津子さんは、地域の人とジオパークの関わりについて世界各地の事例を紹介しました。その後は、ガイドや防災、教育などのテーマ別分科会で参加者が議論を重ね、大会宣言が採択されました。私が参加したガイド向け分科会では、初心者からベテランまで経験値は様々でしたが、「誰にとっても分かりやすく楽しめるジオパーク」を重視する意識が共有され、自由闊達な意見交換と柔軟な思考・対応が、ジオの魅力を彩り豊かに伝える“人”を育てることになると実感しました。“おもてなし”のまちである萩にこそ意義深いもので、今後この学びを生かしたいと思います。

(報告 萩市地域おこし協力隊員 河津梨香)

【大会に参加して】 萩ジオパーク構想推進協議会 副会長 中村和末

第6回日本ジオパーク全国大会霧島大会は、11月27・28・29日、約9000人を集めて大成功のうちに終わりました。

萩市からジオパーク認定に向けて活動してきた16名が参加しました。笠山をはじめ伊良尾火山と“龍が通った道”など、阿武火山群を学習した私たちは、朝5時に須佐を出発しました。バスの中で、今日までの活動を総括しながら、全国大会で何を学ぶのか、共通理解のための結団式を行いました。会場到着後は、開会式ののち2日間、9つの分科会に分かれて活発な討議が行われました。そこでは、今日までの萩での活動が、いかに目的がなく自然発生的で幼稚な活動であったかを思い知らされました。ジオパークの全国組織である日本ジオパークネットワークは、行政、企業とは別に「社会的活動をする」非営利の民間組織(特定非営利活動法人)であり、ジオパーク活動を行う地域が支援を行うに相応しい組織になっているかどうか、また活動への取組を発展させていけるかどうかについて討議が行われました。自然の成り立ちを知り、人間と自然界の関わり方を学び、人間社会の発展に活かすことの意味を学びました。帰りの車中、“学んだ事を萩で行う”と、みんなで話し合いながら自分の持ち場に帰って行きました。



(全国大会 開会式)



(写真を手に萩のジオサイトを解説)

第6回日本ジオパークネットワーク全国大会 霧島大会宣言

わたしたち大会参加者は、ここ霧島の地に集い、これまでのジオパークの活動を振り返り、日々の活動から得られた知識と経験を共有し、これからのジオパーク活動についての指針を得るために議論を重ねた。

1. 有限の価値ある地球の資源は、私たちの暮らしや生物に影響を与えてきた基盤である。その価値を地域で認識し、ジオパーク活動のなかで保全を進め、それを地域の持続可能な発展に活かす。
2. これまで各ジオパークで進められた教育活動により成果や課題が蓄積されてきた。それらを整理し、教育に携わる多くの人と共有することで活動の質を保ちながら教育活動を進めていく。
3. ジオパークにおけるガイド活動とは、大地と人と自然のつながりであるジオストーリーを自分の言葉で、楽しく、分かりやすく伝え、安全に案内することである。そのために日頃から知識や技術の向上に努める。
4. ジオパークは防災教育や災害対応などでの役割を果たすものである。そのためにJGNの防災支援ガイドラインが必要であり、今後、そのための議論を続けていく。
5. 全国から集まった44人の市町村長は、なぜジオパークのネットワークに加盟したのかという原点に基づき、地域レベルから国際レベルまでの問題解決が図られるよう、適切にリーダーシップを発揮する必要性を確認した。
6. ジオパークは自然公園等の諸制度と、保護・保全やツーリズムについて、情報を共有し連携を図る。
7. 立場によって思い描くジオパークはさまざまであるが、ジオパークの活動は成長していくものであり、地域や活動の展開によって目指すものは明確になっていく。
8. ジオパーク活動も、ユニバーサルデザインも様々な人の関与が必要である。様々な立場にある人、様々な状況にある人、様々な分野に携わる人。そして未来を担う人、みんなが心地よいジオパークを実現するために、ユニバーサルデザインは、すべての人の接着剤となる。

阿武川歴史民俗資料館（川上地域）で

萩ジオパーク構想を紹介

11/5(木)～30(月)

阿武川歴史民俗資料館（火曜日休館、入館料100円）では、阿武川ダム完成40周年記念「高島北海と長門峡」と題した、特別展を開催しています。明治から大正期にかけて活躍した、萩出身の日本画家である高島北海は長門峡の名付け親であり、長門峡や須佐湾を天然記念物として保護し、観光に資するために遊歩



道等の整備を進めるに当たって、自身が絵を描き、その代金を全額寄付しました。ジオパーク活動の先駆けとも言える人物です。地元に残る北海の絵10点余りを展示するこの機会に、ジオサイト「長門峡」を紹介するパネル展示を行います。阿武川ダム建設に伴い、北海が紹介した当時よりは、見どころは少なくなっていますが、北海が整備に尽力した5.5kmの遊歩道は、ちょうど紅葉の時期を迎えています。この機会に観覧、紅葉狩りはいかがでしょうか？

コラム 認定のハードルは上昇 事務局長 福島康行

今回の日本ジオパークネットワーク全国大会で、ジオパークを目指す地域を対象に行われた事前相談会に参加しました。そこでは、「ユネスコの正式プログラム化」もあり、ジオパークの認定基準のハードルは上がってきている。加盟することで日本や世界のジオパークにどんな貢献ができるのか、他のジオパークがやっていないことを見せてほしい。ジオパークに正解はない。ジオパークとなって何がしたいか、どんな地域になりたいか。ジオパークを目指す目的をしっかりと持って臨んで欲しい」と説明がありました。改めて肝に銘じ、取り組んでいきたいと思えます。



(大会会場でのブース発表)